飴だま

新美南吉

春のあたたかい日のこと、わたし舟にふたりの小さな子どもをつれた女の旅人がのりました。

舟が出ようとすると、

「おオい、ちょっとまってくれ。」

と、どての向こうから手をふりながら、さむらいがひとり走ってきて、舟にとびこみました。

舟は出ました。

さむらいは舟のまん中にどっかりすわっていました。ぽかぽかあたたかいので、そのうちにいねむりをはじめました。

黒いひげをはやして、つよそうなさむらいが、こっくりこっくりするので、子どもたちはおかしくて、ふふふと笑いました。

お母さんは口に指をあてて、

「だまっておいで。」

といいました。さむらいがおこってはたいへんだからです。

子どもたちはだまりました。

しばらくするとひとりの子どもが、

「かあちゃん、飴だまちょうだい。」

と手をさしだしました。

すると、もうひとりの子どもも、

「かあちゃん、あたしにも。」

といいました。

お母さんはふところから、紙のふくろをとりだしました。

ところが、飴だまはもう一つしかありませんでした。

「あたしにちょうだい。」

「あたしにちょうだい。」

ふたりの子どもは、りょうほうからせがみました。飴だまは一つしかないので、お母さんはこまってしまいました。

「いい子たちだから待っておいで、向こうへついたら買ってあげるからね。」

といってきかせても、子どもたちは、ちょうだいよオ、ちょうだいよオ、とだだをこねました。

いねむりをしていたはずのさむらいは、ぱっちり眼をあけて、子どもたちがせがむのをみていました。

お母さんはおどろきました。いねむりをじゃまされたので、このおさむらいはおこっているのにちがいない、と思いました。

「おとなしくしておいで。」

と、お母(かあ)さんは子(こ)どもたちをなだめました。

けれど子どもたちはききませんでした。

するとさむらいが、すらりと刀(かたな)をぬいて、お母さんと子どもたちのまえにやってきました。

お母さんはまっさおになって、子どもたちをかばいました。

いねむりのじゃまをした子どもたちを、さむらいがきりころすと思ったのです。

「飴(あめ)だまを出(だ)せ。」

とさむらいはいいました。

お母さんはおそるおそる飴だまをさしだしました。

さむらいはそれを舟(ふね)のへりにのせ、刀(かたな)でぱちんと二(ふた)つにわりました。

そして、

「そオれ。」

とふたりの子どもにわけてやりました。

それから、またもとのところにかえって、こっくりこっくりねむりはじめました。

※このテキストは、青空文庫をもとに字体を改めルビを振りました。

【解説】

新美南吉は、大正二（一九一三）年七月三〇日、今の愛知県半田市岩滑（やなべ）に生まれ、本名は渡辺正八。八歳で亡き母の実家 新美家に養子入りして新美正八となります。半田中学時代、雑誌『赤い鳥』への投稿をきっかけに北原白秋に見出され、昭和七年一月号で、お馴染みの代表作『ごん狐』が世に出ました。昭和一一（一九三六）年、東京外国語学校を卒業。昭和一三（一九三八）年から五年間、安城高等女学校の教員を勤め、この時期に多くの作品を残しますが、結核で分限免職。その直後二九歳の若さで亡くなりました。昭和一八（一九四三）年三月二二日のことです。

「飴だま」は、昭和八（一九三三）年、南吉が東京外語二年のときに、「カシコイ一年小学生」に「アメダマ」として掲載されたのが最初です。